

初習中国語用共通教材開発の試み —共通教育としての初習中国語教育実施問題を中心に—

何 暁 毅
齋 藤 匡 史

要旨

山口大学共通教育における初習外国語としての中国語教育は従来、非常勤講師を含めた各授業担当者にシラバスや教授内容（教材）、授業進行、成績評価などを任せてきた。そのため、客観的な成績評価を求められている現在、さまざまな問題が生じている。それら問題解決の突破口として、共通教育のカリキュラム改革を機に、中国語分科会の有志が統一教材を開発した。本稿はその開発の基本方針や、テキストの構造、狙い、2種類のテキストそれぞれの特徴、お互いの連携、新たな試みなどを総括した。最後に共通教育における初習外国語としての中国語教育の現状、問題点、今後の課題、将来への展望などをまとめた。

キーワード

中国語、テキスト（教材）、初習外国語、コミュニケーション、文型・表現

はじめに

山口大学共通教育において、過去10年間で中国語履修者数は倍増し（入学定員はほぼ一定）、全クラス数も20から50クラスへと拡大している。しかしながら授業を担当する専任教員数はほとんど変化が無く、もっぱら非常勤講師増にたよって教育を運営してきた。教える側の方法論や哲学、重点の置き方が異なり、特に使用するテキストは教員任せであったため、どうしても到達レベルに格差が生じてしまう。また同一科目間の到達度の差がありながら、相対評価をするため、同じ合格点でも評価は不均衡になってしまう弊害がでてしまう。

共通教育がこのようなため、学部で履修する専門中国語での語学運用能力の向上がなかなか図れない状況であった。学部開設中国語科目でレベルの異なった学生を指導する

ことは、共通教育の内容を再履修させながら、一方で語学運用能力を高めなければならず、到底、所期の到達目標に届かない

そこで、統一シラバス、統一評価基準、何よりそれらを実現するために、まずテキストの統一が図らなければならない。しかし本学の共通教育初習外国語としての中国語教育に適合した教材はなかなか見つからなかった。そのため、自ら開発することの必要性を感じ、検討を開始した。

1. テキスト開発の経緯

1) コースカリキュラムによる共通教育カリキュラム改革

共通教育における中国語教育の問題点を感じ、統一テキストの開発は喫緊の課題として必要不可欠と感じたとき、本学の共通教育におけるカリキュラム改革が、平成12年から本

格的に検討し始めた。

その改革の目玉はコースカリキュラムの導入である。

我々はこれを最大のチャンスとしてとらえ、教育プログラムの再編、教育目標の統一、シラバスの統一、そしてテキストの統一を図ることにした。

2) これまでの共通教育における初習中国語教育

教養部時代には、第一外国語として8単位履修する(人文、経済、教育、理、農学部)形態をとる学部と、第二外国語として4単位履修する(人文、経済、理学、農学部)形態をとる学部があり、単位数は外国語は実技科目との位置付けから週1回1学期1単位というカウントであった。開設科目には「中国語A(会話)」、「中国語B(読本)」、「中国語C(読本)」、「中国語中級A」、「中国語中級B」があり、当時からA科目は中国人教員、B、C科目は日本人教員が担当した。

1995年度より、教養部改組後、各学部の教養教育単位見直しと外国語履修必要単位数を考慮し、新たに「教養中国語」科目を設け、週1回1学期2単位とされた。旧来の中級に当たる部分を語学だけでなく異文化理解をも含んだ講義を取り入れた科目としたため2単位となったが、当然、授業時間は半減した。この年に工学部が中国語を選択できるようになった。

その他は初修外国語各学科(名称は当時のもの)の総意として、中国語においては「中国語初級会話」、「中国語初級読本」、「中国語初級総合」科目を週1回1学期1単位を維持することとなった。

1996年 教養部改組にともない共通教育センターが設置され、科目と単位数はそのまま継承された。しかし2001年、初習外国語にコース制が導入され、全ての初習外国語科目は2単位化されたが、週2回履修を残して単

位数を倍にする学部と、週1回授業に減らして単数はそのままという学部に分かれた。そのため新たに「中国語入門」科目を設置し、週1回授業に対応した。また新たに医学部保健学科が中国語を選択できるようになった。

このように初習外国語はこの10数年で履修単位を減らされつづけたが、中国語においては受講者数が増大し、開設授業クラス数は20クラスから50クラスへと大幅に増えている。

3) コースカリキュラムにあった初習外国語コース体系の設定

そもそもコースカリキュラムとは『予め設置され「コース」と呼ぶ授業科目グループ群の中から、1つ以上の定められた数のコースを「修了」することを求める教育カリキュラム』である。

共通教育の語学教育においても、このコースという考えに基づいて、教育内容と教育プログラムの再検討が求められる。

文系用コースと理系用コースを分ける

本学は7学部があり、医学部医学科をのぞき、ほとんどの学部は学生に第二外国語として、中国語の選択履修科目として指定されている。しかし、学部によって、学生に対する初習外国語の到達レベルと内容の要求は違い、理工系の学部は学生の教養としての視野を広めるために、また国際的な涵養を培うために、英語以外の外国語を「できれば履修してほしい」としている。しかも単位数の制限もあるので、こうなると、当然内容の濃い授業はできない。

一方、人文学部や、経済学部など一部の文系学部は、将来的に専門的に中国語を勉強しなければならないかも知れないし、中国語を使った仕事に就くかも知れない、そのため、共通教育段階で、教養としての外国語教育より、むしろ学部専門基礎のような位置づけとなる(理系基礎科目は理系学部専門基礎の位置づけと同じような)。

そのため、初習外国語のコース設定は、従来の実績と経験を参考し、文系学部向けコースと理系学部向けコースを分けることにした。文系学部向けコースは原則、1クラス30人を基準に、週に2コマ授業を年間8単位ワンセットとした。一方、理系学部向けは原則、1クラス50人を基準に、週に1コマ授業年間4単位とした。8単位の授業は「語初級」で、4単位授業は「語入門」である。

各コースの定義

入門コース：それぞれの外国語の初歩を学習するためのコースである。1つの外国語の入門の授業を週1コマを受講し、前期2単位及び後期2単位の計4単位を修得し、修了するコースである。

基本コース：それぞれの外国語の基礎をひとつとおり学習するためのコースである。1つの外国語の初級の授業を週2コマを受講し、前期4単位及び後期4単位の計8単位を修得し、修了するコースである。

発展コース：それぞれの外国語の基礎をひとつとおり学習するだけでなく、さらにその外国語の運用能力を発展学習するためのコースである。一つの外国語の初級の授業を週2コマを受講し、前期4単位及び後期4単位の計8単位を修得して、さらに当該コースの他の授業を2単位以上を修得し、修了するコースである。

なお、入門コースは基本的に理系学部向けの授業で、基本コースは文系学部向けの授業である。発展コースは基本コースを履修した学生向けである。

コースの実施プランを具体化する

初習外国語分科会（当時は部会）において、様々な議論を経て、上述のコース分けの基本合意が得られた。しかし具体化の過程で、それぞれの言語の特別な事情があり、統一することは難しい状況になった。そこで、各語学は基本コース構造の下、各自の事情にあった目標設定や、授業形態の設定を可能にした。

ここでは中国語コースの実施プランを中心に述べることに留める。

「中国語入門」は週1コマ授業で前期2単位、後期2単位の4単位修得で完了とする。授業内容は中国語の基礎の基礎で、発音の基礎と簡単な日常会話と基本文法の修得である。

「中国語初級」は他の言語と同じ、週2コマ、「中国語初級a」と「中国語初級b」に分けられた。ただし、中国語コミュニケーション重視の授業を実現するため、「中国語初級a」を文法と表現中心に、「中国語初級b」を会話中心に授業内容を細分し、「a」と「b」をセット授業とした。さらに授業担当者も工夫した。説明を多く要求する「a」の授業を原則日本人教師に担当させ、会話を中心とした「b」の授業を中国語ネイティブ教員に担当することにした。

受講者は「a」の授業で伝統的な文法中心の授業と同じように、日本語による中国語の文法の詳しい説明を受け、句型表現などを修得する。それから「b」という新設の授業でネイティブ教員による会話を集中的に練習する。この2つの授業を通じて、学習した内容を確実に身につける。つまり2人の教員による週2回のリレー授業という新たな教育形態を作ろうとした。

このような教育形態ではリレー授業に相応しい教材は不可欠であるにもかかわらず、当時出版された山ほどの中国語教材には適正なものなかった。同じ教育形態を実施している大学は非常に少なかったためである。市販の教材では文法の進展具合や、会話の分量など、リレー授業としては多くの不具合が生じている。ここでもどうしても自分たちの手で開発しなければならない現実に直面せざるを得なかった。

特別経費の後押し

しかし、教材開発は並ならぬ根気と時間などを要する。多くの教材が出版された現在、作るならそれなりの新しさと、特徴がなけれ

ばならない。教材になるものであるから、作る側のそれなりの見識と、中国語の涵養ももちろん求められる。しかも学習の手本になるものだから、ミスのない堅実さが要求される。様々な理由で、着手するにはそれなりの決断が必要であった。

そこで追い風になったのは当時あった「学長裁量経費」の交付であった。

平成13年度、2人の教官による週2回のリレー授業という新たな教育形態に適したテキスト、視聴覚教材と週1回のみクラスの(中国語入門)を対象とした平易な入門テキストを開発するプロジェクトが「山口大学教育研究特別経費 教育改善推進経費」として認められ、140万円が交付された。引き続き、平成14年度「教育研究特別経費—教育改善推進経費」も認められ、50万円が交付された。この経費で筆者2人と当時外国人講師の田梅(現外国語センター教授)3人がチームを構成し、開発に着手した。

4) 基本プランの策定

教材開発には基本プロセスと骨子の確定が必要であった。

3人で多くの議論を経て、基本枠を固めた。

- ①「a」用テキストと「b」用テキスト、2冊を開発すること。
- ②「a」用テキストは文法、文型、表現を中心に、説明などに重点を置くこと。
- ③「b」用テキストはコミュニケーションを中心に、会話や、会話を盛り上げるために、ビデオなどの素材を多く取り入れること。

上述の「教育改善推進経費」でまず中国現地取材と日本での資料集めを行った。

5) ネイティブ発音へのこだわり

日本の初級段階の語学用テキストのほとんどは、発音部分ではその言葉の本来の発音記号に、カタカナを付けて発音を表現している

(一部の辞書までそうなっている)。中国語のテキストも例外ではない。現在各大学で使っている初級用テキストの多くは中国語の発音記号(ピンインという)にカタカナを付けている。しかし他の言語の場合は別として、中国語の発音は日本語の発音より格段に複雑で難しい、カタカナで表記するのはとても無理がある。そのカタカナで学習すると、中国語の正しい発音は永遠に習得できない。

本テキストは、最初から正しい発音を追求し、カタカナをいっさい排除した。その代わりに、すべての発音記号や会話文などを収録したCDを付けた。

2、『中国語スタンダード(文型・表現編)』の特徴と主な内容

1)「文型・表現編」の開発経緯について

日本語を母語とする学生に日本語で中国語を教授するテキストは、簡潔でなければならないと同時に学生が予習、復習しやすいように適度の説明記述も必要であり、ことばの背景となる文化や社会についてもある程度理解できる内容にしなければならない。この相反する命題に、まずこれまでの教授内容の検討から始めた。これまでの教育で使用したテキストのうち、表現や文法、話題・コラムについての説明が相当詳しく記述されているもの、項目タイトルのみでほとんど説明がないもの、その中間にあるものなどさまざまな先行テキストを参照し、その優れた点、改めたほうが良いと思われる点等について議論を重ねた。

さらに第二外国語として週1回の授業で教えるべき内容の分量、文法事項について詳しく検討した。その結果、

- ・発音の基礎ができるまで、漢字の視覚になるべく頼らせない
- ・1000語以下の単語量とする
- ・前後期28回授業で、テキストの教授だけでなく、視聴覚教材を使った中国事情の

紹介、語学留学や検定試験の紹介等が十分可能でゆとりがもてる内容分量とする

- ・中級の学習につながり得る必要最低限の文法事項とする
- ・中国事情を伝えることができる表現や内容を盛り込む
- ・学習者が辞書を引くようにするため日本語訳は基本的に付けない

などを骨子として、2004年に試用本を教室で使用し、1年間かけて発音編の整理、表現、文型、語句の訂正を行い、2005年に語彙索引を巻末に置き、CDを付録として正式出版した。さらに2006年版では使用した教員の意見を取り入れ若干の内容訂正を行った。

2)「文型・表現編」の基本構造

第1課から第4課は発音。第5課から文型を中心とした部分になる。その構造は学習事項

各課の冒頭にその課で学習する内容を提示

新出語句

本文に出る新出語句をまとめて提示

文型・表現

テキストの中心部分。体系的な文法現象を効率よく学ばせるため、会話体単文を中心にした。

ポイント

ポイントの新出語句をまず理解させ、ポイント各項で最低限の文法説明を記述、例文によってさらに表現・文型の理解を進める

練習問題

日本語訳、中国語訳、語順問題、聞き取りを配した。

新語・流行語

コラム形式で中国の最新流行語を提示した。

3)「文型・表現編」の主な特徴

- ・上述の内容のほか、発音編と第5課、第6課まで漢字を提示せず、「オト」による学習導入を目指した。以前にすべてピ

ンインのテキストを使用した経験があるが、学生の発音は確かにそれ以前の学生より格段に上達したが、文の成り立ちや文法事項の理解が不十分であったり、漢字とオトを結びつけるのに学生が苦労した経緯があり、導入部分のみをピンインとした。

- ・会話体の簡潔な文で基本的な文型と表現が無理なく理解できることを目指し、会話4セットから最大でも6セットに抑えた。
- ・学習者の予習復習の便を考慮して文法学習事項に簡潔な説明をつけた。また例文の提示も最小限にした。
- ・最後に「課外課」を配し、構文の学習により、中級や読解授業につながるようにした。
- ・語句索引に最重要語約500語(全語彙の約70%)を提示した。

3、『中国語スタンダード・コミュニケーション編』の特徴と主な内容

1)『コミュニケーション編』の開発経緯について

「コミュニケーション編」の開発は「文型・表現編」の開発がほぼ完了してから始められた。何曉毅は基本構成、本文作成、文法説明、練習パターン作成など主なことを担当し、斉藤匡史と田梅は他の部分を担当した。

「コミュニケーション編」の基本方針

「コミュニケーション編」は「b」用教材として、「a」の授業で「文型・表現編」を通じて、文法を理解でき、文型、基本表現を習得したことを前提条件として、基本構造を構築した。つまり、文法説明をできるだけ簡略し(できれば省略)、日本語の使用も極力減らす(できれば使用しない)、中国語会話をできるだけ増やし、学生になるべく中国語を使った会話練習をさせることなどを基本方

針とした。

文法の取り扱いについて

上述のように、この「コミュニケーション編」は「文型・表現編」の姉妹編で、週2回の授業でそれぞれ併せて使うことを想定している。「文型・表現編」を使った「a」の授業で詳しく文法などを説明したことを前提にしている。それならこのテキストでは文法部分を省略した方がいいのではないかと、最初考えた。しかし「b」の授業でも文法を簡単に説明したい場合や、すこし説明した方がいいと思うときに、受講者は毎回「文型・表現編」テキストを持ってきてもらえるのも不便と思い、文法を追加することにした。

整合性を考え、文法用語など基本的に「表現編」に従った。

試用版と正式版の出版

初稿を上梓したのは2004年秋、それから幾度の討議と修正を繰り返し、ようやく翌年の春に試用版が東京の白帝社によって出版された。

その後、1年間の使用を経て、学生と使用した教員の意見を探り入れ、再修正し、2006年4月正式出版された。

2)「コミュニケーション編」の基本構造

「コミュニケーション編」は発音部分を含め、全部で20課によって構成された。発音部分は「a」の「文型・表現編」より1課が多く、これは発音をより正確にするためでもあるし、文法説明など、「b」の授業は「a」より1回遅れる必要もあったためであった。

発音部分をのぞき、毎課の基本構造は以下のようなものである。

生詞詞組(新出単語)

補充単語含み、新たに出た語句や固有名詞など。

口語会話(会話)

1段にAさんとBさん2人4往復を基本に、2段立てとする。

語法説明(文法・文型説明)

できるだけ簡潔明快にした。

課堂練習(授業中ドリル)

補充単語などを使い、多く用意。

死記硬背(丸暗記)

これだけは絶対覚えてもらいたい文。

課外作業(宿題)

どこどこを復習予習、どのようにトレーニングするなどがより具体的にした。

中国万事通(中国あれこれ)

コラム。ページの空白部分に、写真を生かして、生の現代中国事情を簡潔に記した。

3)「コミュニケーション編」の主な特徴

逆の発想で内容を日本の大学生活とした

現在、日本の大学で使われている中国語テキストのほとんどは、中国での留学生活や観光などを内容としている。初めて習う外国語のテキストとして、その言葉の背景や文化をも伝えなければならない宿命を背負っているため、仕方のないことかもしれない。しかし、そのようなテキストを使ったコミュニケーションを中心とした授業では、学生同士ではとても練習しづらいのも紛れもない事実である。その最大の原因は、学んでいる内容が学生がほとんど知らない中国のことで、練習に使える語句が非常に限られていることである。

幸いにも、このテキストの姉妹編「文型・表現編」は中国のことを中心としていて、文法の説明とともに、中国の文化や社会事情も伝えている。そのため、このテキストは実践的なコミュニケーションをしやすいように、学生が日常でよく使う言葉を中心に編集することにした。

会話文を充実

「a」用の「文型・表現編」の本文は単文であった。様々な文法現象をスタンダードなことばで表現するのは、この方法が一番効果的であった。しかし「コミュニケーション編」では具体的な活用を考えなければなら

い。そのため、全部生活のシーンを設定し、AさんとBさんの会話で構成された。

1年で中国語の文法表現を一通り学ぶので、毎回の文法現象をたくさん盛り込まなければならない。それらを1つのシーンの会話の中に全部組み込むのは到底無理がある。かといって会話が長くなると、初級テキストとして適切ではない。会話の充実の必要もあるから、毎課の会話文を2段にし、それぞれ適当な量の会話文を組み込んだ。

課内練習の充実

1時間半の授業中に、同じシーンの会話ばかりを練習するのも飽きやすい。そのため、授業中に練習できるように、文法の実例説明のあとに、挿絵付きの多くのパターンドリルを用意した。しかも全部2人で聞き答えできる形式にした。学生が隣同士で実際にそれらの練習パターンで会話練習ができる。

暗記部分の追加

筆者の経験をふまえ、外国語を学ぶとき、暗記することはとても効果的だと考える。そこで、このテキストは本文の中に出た特に使用頻度の高い言葉、覚えれば必ず役に立つ言葉を集め、暗記部分を設け、学生に最低限これだけを丸暗記させるようにした。教える教員にもできればこれらを毎回の小テストに出題して、暗記させる工夫をするようにとお願いした。

課外練習の重視

外国語の勉強は時間、根気との戦いである。とにかく毎日時間を作って、特に声を出して朗読すること、そして予習復習をしなければならない。予習しなければ授業についていけないし、また、復習しなければ勉強したものは身につけられない。そのため、宿題も工夫した。普通よくある何かを訳して、何かを作文するようなものだけでなく、必ず具体的に、来週の授業のために、最低限何を復習し、何を予習すべきかなどを指示した。

4、『中国語スタンダード』の「文型・表現編」と「コミュニケーション編」の内容比較

それでは、週2コマリレー授業方式のために開発された『中国語スタンダード 文型・表現編』と『コミュニケーション編』の内容は具体的にどのようなものか、表1にまとめた(次頁参照)。

「a」用の「文型・表現編」と「b」用の「コミュニケーション編」の内容は、微妙にずれていることを分かつと思う。これはつまり「a」は先行授業として文法の説明、文型・表現の練習などをして、「b」ではほとんど説明をせずに、集中的に練習できるように配慮したものであった。

5、「語句索引」作成に当たって

1) 日本語の取り扱いについて

学習者の便のために、語学のテキストではほとんどそのテキストで使用した語句の索引がある。本テキストも語学学習用テキストとして、語句索引を作成する必要がある。しかしどのような索引がよいか、検討を重ねた。

一般的なテキストの語句索引は、発音順に、原文の語句、その語句の発音、その語句の日本語の意味、その語句の初出ページなどによって構成される。本テキスト当初もこの形で作成しようとした。しかしメンバーの長い教育経験及び語学の習得体験から得た結論では、外国語の習得には辞書の使用など、学習者が自ら調べ、思考し、記憶することは不可欠である。しかし索引に日本語の解釈があれば、学習者はそれでほとんど用が足りるから、辞書を使う必要がなくなる。そこで検討した結果、語句索引の作成に当たっては、学習者には便利な一方で学習の妨げになると判断し、日本語注釈を省略した。新出語句部分も日本語の訳がないから、本テキストだけを見ると、

中国語スタンダード 文型・表現編		中国語スタンダード コミュニケーション編	
第1課	発音(1)	第1課	発音(1)
	中国語とは		中国語発音の特徴と学習の心得
	声調		単母音——基本となる母音
	基本となる母音——「単母音」		声調——れっきとした発音の一部
	母音が組み合わさった「複母音」(1)		声調記号の位置——簡単そうで難しい
	母音が組み合わさった「複母音」(2)		
	声調符号の位置		
第2課	発音(2)	第2課	発音(2)
	—n, —ngで終わる母音		複母音——単母音が組み合わさった母音(1)
	母音“er” —舌をそらして発音する母音		複母音——単母音が組み合わさった母音(2)
	子音(1)		鼻母音——“n”, “ng”で終わる母音
			“er” —舌をそらして発音する母音
第3課	発音(3)	第3課	発音(3)
	子音(2)		子音(1) ——唇を咬いこなそう
			子音(2) ——舌先を唇用に
			子音(3) ——舌の根本に集中
第4課	発音のまとめ	第4課	発音(4)
	ピンインのつづりの変化		子音(4) ——もっとも単純な子音
	声調の変化		子音(5) ——もっとも難しい子音
	“r” (er) のつく音節		子音(6) ——間違いやすい簡単な発音
	“l” の音の違い		
第5課	これは辞書です	第5課	発音(5)
	指し示すことば“zhè”, “nà”		発音を組み立ててみよう
	人称代詞		声調の変化——ルールを覚えよう
	判断を表す副詞“shì”		“er” 化音——北京語のスタンダード
	否定を表す副詞“bù”		軽声——5番目の声調
	疑問文を作る“ma?”		
第6課	これは何ですか	第6課	你是日本人嗎?
	姓名の言い方、聞き方		指し示すことば“這”“那”
	疑問詞“shénme”, “shuí”		人称代詞“我”“你”“他”“她”“他”
	名詞+“de”+名詞		判断をする副詞“是”
			否定をする副詞“不”
			疑問文を作る“嗎”

表1 中国語スタンダード 「文型・表現編」と「コミュニケーション編」内容比較(1)

			“是不是”形の疑問文
			副詞“也”“都”の使い方
第7課	天氣が良い	第7課	您貴姓?
	形容詞が述語になる文		姓名の言い方、聞き方
	語気助詞“ne”		疑問詞“什么”“谁”“哪”
	指示代詞「これ、この」* x hēge*		名詞+“的”+名詞、及びその省略
	形容詞の部分否定		
第8課	彼らはみんな来ます	第8課	今天天气怎么样?
	動詞述語分「～は(が)～する」		形容詞が述語になる文
	動詞+“的 de”+名詞		形容詞の疑問詞“怎么样”
	動作が連動する文		形容詞+“的”+名詞
	*-yi”の声調の変化		語気助詞“呢”
	*喜欢”+動詞「～するのが好きだ」		指示代詞「これ、この」
			形容詞の部分否定と全部否定
第9課	運転免許証はありますか	第9課	明天你未学校吗?
	所有と場所表現“有 yǒu”		主語+動詞(述語)+名詞(賓語)
	位置を表すことば“东边 dōngbiān”		主語+時間(状語)+動詞(述語)+名詞(賓語)
	“在 zài”場所表現		上の二つの文型の疑問文及び否定文
	数の聞き方		動詞が連動する文
			動詞+“的”(名詞)
			主語+“喜欢”+動詞(述語)+名詞(賓語)
第10課	どちらにお勤めですか	第10課	你有邮票吗?
	介詞“在 zài”		場所+“有”+物・人
	進行を表す副詞“在 zài”「～している」		物・人+“在”+場所
	接続詞“和 hé”		人+“有”+物など
	語気助詞“把 ba”		方位詞
	年月日と曜日(1)		数の聞き方と表現の仕方
			数量詞と、数量詞の文における位置
第11課	行きたくない	第11課	最近你在忙什么呢?
	助動詞“要 yào”, “想 xiǎng”		主語+“在”+場所+動詞(述語)+名詞(賓語)
	お金の数え方、値段の言い方		主語+“在”+動詞(述語)+名詞(賓語)
	大きな数		主語+“教”+名詞(賓語) 1+名詞(賓語) 2
	年月日と曜日(2)		年月日や曜日などの言い方(1)
			呼びかけや推測などの“吧”の使い方

表1 中国語スタンダード「文型・表現編」と「コミュニケーション編」内容比較(2)

			介詞及び介詞の使い方
			“一”の発音の変化
第12課	ここから遠いですか	第12課	你的电话号码是多少?
	介詞“从 cóng”、“离 lí”、“到 dào”		主語+“想”“要”+動詞(述語)+～
	変化を示す“了 le”「～になった」		お金の言い方、値段の言い方
	完了を示す動詞+“了 le”「～し終えた」		電話番語の聞き方、答え方
			年月日や曜日などの言い方(2)
第13課	四川に行ったことがある	第13課	你家离学校远不远?
	接続を表す“-着-zhe”		介詞“从”“离”“到”の使い方
	経路を示す“-过-guo”		動作、行為の完了、完成を表す“了”とその否定
	動作の回数を表す補語		「～になった」という変化を表す文末の“了”
	“要 yào”と助動詞		“快”+～+“了”
	“快～了”「もうじき～になる」		時刻の言い方、聞き方
			時間の言い方、聞き方
			動詞の繰り返し
第14課	少し話すことができる	第14課	你去过中国吗?
	助動詞「～することができる」		主語+“打算”+動詞(述語)+名詞(賓語)
	“是～的”の強調表現		主語+動詞(述語)+“过”+名詞(賓語)
	仮定の表現		主語+動詞(述語)+“着”+名詞(賓語)
	「少し～」の言い方		主語+動詞(述語)+動作の回数(数量)+名詞(賓語)
第15課	まだ書き終わっていない	第15課	你会说汉语吗?
	結果補語をともなう動詞		“会”+動詞(述語)
	方向補語をともなう動詞		“能”+動詞(述語)
	可能補語による「～できる」表現		“可以”+動詞(述語)
	中国の地名(1)		主語(+是)+時間・方法など+動詞(述語)+“的”+～
			“如果”(“要是”)～,“就”～
			動詞(形容詞)+“一点儿”
			“有点儿”+形容詞
第16課	起きるのが早い	第16課	你做完作业了吗?
	状態や程度を表す補語		動詞+動詞の結果を表す語(結果補語)
	比喩の表現“好像～(似的/一样)”		動詞+動詞の方向を表す語“去”“来”など(方向補語)
	比較の表現“比”、“跟～一样”		動詞+“得”+結果を表す(可能補語)
	中国の地名(2)		動詞+“得”+形容詞・副詞など(程度補語)
			補語のまとめ

表1 中国語スタンダード「文型・表現編」と「コミュニケーション編」内容比較(3)

第17課	ペンを貸して下さい	第17課	今天你好像挺高兴的？
	介詞“把”による表現		“好像”～“一样”（“似的”）
	兼語文		“好像”～“一样”（“似的”）
	使役の表現“使”		A+“比”+B+形容詞
	受身の表現“被”		A+“没有”+B+形容詞
			A+“跟”+B+“一样”+形容詞
第18課	左側からバイクが来る！	第18課	请把酱油递给我。
	現象を表す文		主語+“把”+名詞+動詞（述語）+補語など
	疑問詞の慣用的な用法		主語+動詞（述語）+賓語（主語）+動詞（述語）+賓語
	予想の表現		“使”“叫”“让”+人+～
	依頼の表現		“被”+～+述語
	副詞“就”の使い方		
	世界の国名		
課外課	いろいろな構文	第19課	听说这里冬天雪很大。
	“是～，还是～”		現象を表す文
	“因为～，所以～”		疑問詞の慣用的な用法
	“越～越～”		“恐怕”“也许”+～
	“连～也（都）”		“听说”+～
	“除了～以外，～”		副詞“就”の使い方のまとめ
	“一边～一边～”		
	“～～就～”		
	“虽然～，还是～”		
	“不但～而且～”		
語句索引		第20課	你是喝茶还是喝咖啡？
			“是”～，“还是”～
			“除了”～“以外”～
			“连”～“也”（“都”）～
			“～”～“就”～
			“越”～“越”～
			“虽然”～，“但是”～
			“不但”～，“而且”～
			“因为”～，“所以”～
		語句索引	

表1 中国語スタンダード 「文型・表現編」と「コミュニケーション編」内容比較(4)

中国語の語句の日本語意味がどこもない。復習予習するために、学習者は自ずと自分で辞書を使って調べなければならない。その過程は語学の習得には貴重な勉強時間となると考えた。

この考え方は「文型・表現編」と「コミュニケーション編」両方に共通した方針として、それぞれの語句索引に生かした。

2) 実際に使用して

この方針は最初少し不安があった。つまり学生に素直に受け入れてもらえるのか、日本語訳がないから不便で不満が噴出しないうか。しかし実際に使用してみると、ほとんど不満が聞こえなかった。むしろ日本語の意味を調べなければならないから、これをきっかけに辞書を買うつもりがなかった人まで、辞書を買って使い始めた。実際学生の辞書保有率と使用率は以前より飛躍的に高くなった。筆者のクラスでは9割以上の学生は電子辞書かペーパーの辞書か、何らかの中国語の辞書を所有している。授業中に問題を出すと、ほとんどの学生はすぐテキストと辞書を交互に参照しながら作文や会話練習するようになった。

6, 今後の課題

1) 山口大学共通教育中国語教育の現状

コースカリキュラム実施をきっかけに、本学の共通教育における中国語教育では、他の中国語担当教員の協力を仰ぎ、使用するテキストとシラバス、つまり教授内容、進度、評価基準を原則統一した。

「中国語入門1・2」では未だ市販のテキストを使っているが、「中国語初級」の「a」「b」両方、自前のテキストを使えるようになった。「a」は日本人教員が教えていて、「b」は中国人教員が教えている。「入門」クラスは50人を原則としているが、ほとんどオーバーしている。「初級」クラスは定員30

人もほとんどオーバーしている。

2) 共通教育としての中国語教育の問題点 進度のバラツキ

統一シラバスでは教授内容、進度、評価基準を全部決めているが、実際の授業は教員自身に任せているため、進度のバラツキが生じている。そして理想としている「a」が先行し、「b」が後を追うという形になかなかうまくない。

評価のバラツキ

シラバスにより、評価基準を統一しているが、一本化するために、受講者全員(1科目、約500名×主要3科目)が一同に会して試験を受けることは不可能であるため、試験は原則各授業、各教員が個別に出題して実施しているため、様々な要因で成績の判定は客観的とは言い難い。

視聴覚教材の使用に関するジレンマ

最初の計画では「b」の授業に3分の1の時間に最新のビデオなどによる中国事情紹介や、会話練習などでは原則中国語を使うなどがあった。しかし実際ビデオを作成する資金も、時間もないので、計画していたテキスト連動型の視聴覚教材ができなかった。そして実際に授業をしてみて、そもそも練習だけが精一杯で、他のものを見る時間的な余裕があまりない。そして現在「b」を教えているネイティブの教員のほとんどは日本語ができるので、授業中はどうしても日本語を多く使ってしまう傾向もある。

3) 喫緊な課題

こうした状況を改革するために、喫緊な課題として

- ・クラスを増やすなどの措置で定員オーバー問題を解決。
- ・教育方針などを周知するための非常勤教員を含めた分科会内のFDの実施。
- ・本学で使用しているテキストそのものと、

それに準拠した音声教材，自習教材，練習問題がいつでもどこでも Web 上から使用できる CAI システムの構築。

- ・同一科目ごとの定期試験外評価テストの Web 展開
 - ・同一科目定期試験の同時受験の可能性の研究
 - ・「中国語教室」Web の立ち上げと学習情報，留学，語学研修情報の提供
 - ・Web 上で中国事情理解のための各種コンテンツ，ツールの提供をめざす。
- などが考えられる。

4) 将来への展望

山口大学の学生のレベルやカリキュラムに適合した，CAI 教材の開発 評価システムによる達成度の客観化，評価基準の統一が図られる。

初習外国語は大学から始めるため，1年次の共通教育における達成度を外部認定試験導入して測るまでのレベルにはなく，学生がそのコストを進んで負担する意味は非常に少ない。本学の教育実情にあった Web-CAI 教材，評価システムを構築し，WEB 上のレベル試験実施などは，学生に経済的負担を求めず，外部認定試験に代替できる。

また「中国語教室」Web の立ち上げにより学習情報，留学，語学研修情報などのサービス提供が可能にする。さらにデジタル化された映像，画像教材の配信，中国語学習コンテンツや中国関連サイトの紹介によって，学生の中国事情理解が格段に進むであろうし，資料プリントなども Web 上で全受講者に配布することが可能にする。しかも公式なチャットやメッセージを利用した，国内他大学の中国語教室との交流も可能になるし，学生のこの「中国語教室 Web サイト」の利用が，中国と中国語情報への窓口となる。

将来的には，このシステム利用を視野に入れた，統一試験の可能性が高まるであろうし，

受講者全員の到達度が客観的に測れるようになるものと想像する。

終わりに

語学テキストの作成は苦勞の割に，達成感が少ない。

まずテキストなので，それなりの見識及び学問的なレベルがなければならない。間違いがあれば天下の笑い物になることがあっても，同情されることがまずない。

そして学習の手本となるので，ミスが許されない。

何より山ほどある中国語テキストの中で，どうやって存在価値を示すか。学生の学習レベルに適合するか，教育目標に達成できるか，授業方式に適合できるか，教えやすいか，学習意欲を引き出せるのか・・・

苦勞して，テキストは完成できた。だからといって，達成感で一杯とはいかなかった。むしろ不安が大きかったからだ。使用に耐えられるのか，当初の目標をクリアできたか，ミスはなかったか・・・

悩みは続く，だから挑戦も続かなければならない。

(大学教育センター 助教授)

(経済学部 教授)

【参考文献】

- ・「山口大学共通教育におけるコースカリキュラム実施の現状と課題」何曉毅・木下真，『大学教育』第3号(2006)
- ・「共通教育履修案内」(平成18年度)，山口大学大学教育センター
- ・「中国語スタンダード・文型・表現編」齋藤匡史・何曉毅・田梅，2005，白帝社
- ・「中国語スタンダード・コミュニケーション編」何曉毅・齋藤匡史・田梅，2006，白帝社

付録

1、「中国語スタンダード・コミュニケーション編」前書き

このテキストは『スタンダード中国語(文型・表現編)』(以下「表現編」)の姉妹編です。週二回の授業でそれぞれ併せて使うことを想定しています。文法用語など基本的に「表現編」に従っていますが、まれに不一致があるかもしれません。

現在、大学で使われている中国語テキストのほとんどは、中国での留学生活や観光などを内容としています。初めて習う外国語のテキストとして、その言葉の背景や文化をも伝えなければならない宿命を背負っているため、仕方のないことでしょう。しかし、そのようなテキストを使ったコミュニケーションを中心とした授業では、学生どうしではとても練習しづらいのです。その最大の原因は、勉強している内容が皆さんがほとんど知らない中国のことで、練習に使える語句が非常に限られていることです。

幸いにも、このテキストの姉妹編「表現編」は中国のことを中心としていて、文法の説明とともに、中国の文化や社会事情も伝えています。そのため、このテキストは実践的なコミュニケーションをしやすいように、学生の皆さんが日常でよく使う言葉を中心に編集することができました。

より効果的に使っていただくために、以下のことを参考になさってください。

- ・外国語の勉強は時間、根性との戦いです。とにかく毎日時間を作って勉強しましょう。特に声を出して朗読することをぜひ行ってください。
- ・予習復習は欠かせません。予習しなければ授業についていけません。予習として、必ず【新出語句】を覚えてください。また、復習しなければ勉強したものは身につけられません。復習は文法を含めて、習った言葉をよく練習してください。
- ・最低限、“死記硬背”(暗記しよう)の部分を暗記してください。この部分は特に使用頻度の高い言葉なので、覚えれば必ず役に立ちます。

コミュニケーションの授業なので、とにかく話しましょう。もちろん中国語で、隣の方とよく練習してください。機会があれば、学校の中国人留学生と交流し、勇気を出して中国語を使いましょう。きっと新たな感動を覚えます。

2, 中国語初級 1 A 統一シラバス

開設科目名	中国語初級 1 a	単位数	2 単位	担当教官				
開設期	1 年生 前期	開設時限		授業区分	講義			
対象学生		備考						
<p>授業の概要 20 年来の改革開放政策により社会が激変した中国, WTO 加入により世界に窓を開いた中国, GDP 世界第 6 位の経済大国, 「世界の工場」と呼ばれる中国は, 21 世紀中葉, 世界第 3 位 GDP を有する国になるとみられる中国は, アジアと世界にどのような影響を与えていくのだろうか。中国から発信される情報を受けとめ, 膨大なネットワークにアクセスするには中国語の学習が必要である。 中国語は発音とアクセントに特徴ある言葉で, 入門期には多くの時間をこの習得にかけなければならない。しかし文法は簡潔であり, 表現, 文型の学習を積み重ねるうちに自然とことばの法則が見えて来る。中国語の学習がアジア社会に目を向ける窓口となることを願う。</p> <p>授業の一般目標 中国語の発音とアクセントを正確に修得し, 入門期に必要な中国語運用能力を養成する。あわせて中国理解を深める。</p> <p>授業の到達目標 知識・理解の観点: 中国語の発音とアクセントを習得し, 初歩的な表現形式を理解・運用できる。 関心・意欲の観点: 中国事情に関心を持ち, 積極的理解に努めることができる。 態度の観点: 授業外学習や, 授業に積極的に参加する。 技能・表現の観点: 基本文法を理解し, 正確な発音と簡単な会話ができる。</p>								
授業計画【概要・授業の目標(予定)】								
前半は発音を中心に学習し, 初歩的な文法をも習得する。								
成績評価方法(総合)								
定期試験(中間試験と期末試験)や, 小テスト/授業内レポート, 宿題/授業外レポート, 授業態度や授業への参加度などによる総合評価 出席が 2 / 3 に満たない者は, 定期試験を受けられない								
成績評価方法(観点別)								
	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
定期試験(中間・期末試験)							70%	
小テスト・授業内レポート							20%	
宿題・授業外レポート							評価に加えず	
授業態度・授業への参加度							10%	
受講者の発表(プレゼン)・授業内での制作作品							評価に加えず	
演習							評価に加えず	
出席							欠格条件	
その他							評価に加えず	
合計							100%	90%
教科書	「中国語スタンダード(文型・表現編)」, 齊藤匡史, 何曉毅, 田梅, 白帝社, 2003 年 教科書備考: 販売: 文栄堂山大前店							
参考書	参考書備考: 辞書などガイダンス時に指示する。							
メッセージ	・初回授業で定員を上回る場合, 抽選を行うので必ず出席すること。抽選後の履修は認めない。 ・後期からの履修変更は認めない。後期開設科目に注意して履修すること。 ・全てのクラス抽選にもれた学生を対象に後日, 履修相談をおこなうので掲示に注意すること。 なお, シラバスはすべて予定であること。学習状況により調整することがある。							
キーワード	中国語 初級 a							

3, 中国語初級 1 b 統一シラバス

開設科目名	中国語初級 1 b	単位数	2単位	担当教官				
開設期	1年生 前期	開設時限		授業区分	講義			
対象学生		備考						
<p>授業の概要 この授業は「中国語初級 1 a、2 a」とあわせて受講するものである。「b」科目は、中国人教官の指導による授業である。この授業ではより多く中国語による指導が行われる。</p> <p>授業の一般目標 発音練習と表現学習を積み重ね、中国語の発音、アクセント、基本的な表現を習得し、簡単な日常会話が可能程度の中国語コミュニケーション能力の養成を目指す。また中国事情や中国文化の紹介を通じ、発展著しい中国の現状を認識、理解してもらいたい。</p> <p>授業の到達目標 知識・理解の観点：基本文法の応用および理解、基本会話の理解と応用ができる。 関心・意欲の観点：中国語、中国文化に関心を持つ。 態度の観点：出席を重視し、小テストや、授業中の練習など積極的に参加する。 技能・表現の観点：中国語の発音や、基本文法を習得し、簡単な会話ができる。</p>								
授業計画【概要・授業の目標(予定)】								
発音を中心に、簡単な会話練習を行う。								
成績評価方法(総合)								
出席や、期末試験、授業の参加度、小テストなどによる総合評価								
成績評価方法(観点別)								
	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
定期試験(中間・期末試験)							70%	
小テスト・授業内レポート							20%	
宿題・授業外レポート							評価に加えず	
授業態度・授業への参加度							10%	
受講者の発表(プレゼン)・授業内での制作作品							評価に加えず	
演習							評価に加えず	
出席							欠格条件	
その他							評価に加えず	
合計							100%	0%
関連科目	中国語初級 1 a							
教科書	「中国語スタンダード(コミュニケーション編)」, 何曉毅 ほか, 白帝社, 2005年 教科書備考: 販売: 文栄堂山前店							
参考書	参考書備考: 辞書を用意すること。辞書は授業中に紹介する。							
メッセージ	毎回出席すること。声を出して発音すること。授業外の復習予習は大事。繰り返し練習は上達の秘訣。 ・初回授業で定員を上回る場合、抽選を行うので必ず出席すること。抽選後の履修は認めない。 ・後期からの履修変更は認めない。後期開設科目に注意して履修すること。 ・全てのクラス抽選にもれた学生を対象に後日、履修相談をおこなうので掲示に注意すること。 なお、シラバスはすべて予定であること。学習状況により調整することがある。							
キーワード	中国語 初級 b							

初習中国語用共通教材開発の試み

4, 中国語初級 2 A 統一シラバス

開設科目名	中国語初級 2 a	単位数	2 単位	担当教官				
開設期	1 年生 後期	開設時限		授業区分	講義			
対象学生		備考						
<p>授業の概要 前期に引き続き、テキストに沿って入門期に必要な学習を進め、同時にさらに中国理解を深める。</p> <p>授業の一般目標 ・中国語の基本文型を学習し、中国語運用能力を高める。 ・中国事情を理解し、単なることばの習得だけに終わらないようにする。</p> <p>授業の到達目標 知識・理解の観点：系統的に中国語の基本文法を把握し、基礎的なコミュニケーション能力を養成する。 関心・意欲の観点：中国語、中国文化、中国社会に強い関心を持つことができる。 態度の観点：積極的に授業に参加でき、会話練習などを進んで行う。 技能・表現の観点：基本文法を習得し、基礎的な会話能力を備え、簡単なコミュニケーションがとれる。</p>								
授業計画【概要・授業の目標(予定)】								
引き続き基本文型・表現の習得と基礎的な会話の練習を行う。								
成績評価方法(総合)								
定期試験と小テスト、受講態度などによる総合評価								
成績評価方法(観点別)								
	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
定期試験(中間・期末試験)							70%	
小テスト・授業内レポート							20%	
宿題・授業外レポート							評価に加えず	
授業態度・授業への参加度							10%	
受講者の発表(プレゼン)・授業内での制作作品							評価に加えず	
演習							評価に加えず	
出席							欠格条件	
その他							評価に加えず	
合計							100%	90%
関連科目	中国語初級 b							
教科書	中国語スタンダード(文型・表現編)、斉藤匡史、何曉毅、田梅、白帝社、2003年							
参考書								
キーワード	中国語 初級 a							

5, 中国語初級2 b 統一シラバス

開設科目名	中国語初級2 b	単位数	2単位	担当教官				
開設期	1年生 後期	開設時限		授業区分	講義			
対象学生		備考						
<p>授業の概要 前期に引き続き、テキストの沿って中国語の基本的な表現に習熟し、あわせて中国文化、中国事情の理解に努める。</p> <p>授業の一般目標 初級段階で必要な表現を学習し、ことばの運用能力の向上を図る。</p> <p>授業の到達目標 知識・理解の観点：初歩的なコミュニケーション能力を備える。 関心・意欲の観点：中国語、中国文化、中国社会に強い関心を持つことができる。 態度の観点：積極的に会話練習に関わり、コミュニケーション能力を高める努力をする。 技能・表現の観点：中国語による初歩的なコミュニケーション能力を習得し、運用できる。</p>								
授業計画【概要・授業の目標(予定)】								
前期に引き続き、ピンインや発音を練習しながら、コミュニケーション能力の向上に重点を置く。								
成績評価方法(総合)								
定期試験、授業内小テスト、受講態度による総合評価								
成績評価方法(観点別)								
	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
定期試験(中間・期末試験)							70%	
小テスト・授業内レポート							20%	
宿題・授業外レポート							評価に加えず	
授業態度・授業への参加度							10%	
受講者の発表(プレゼン)・授業内での制作作品							評価に加えず	
演習							評価に加えず	
出席							欠格条件	
その他							評価に加えず	
合計							100%	0%
関連科目	中国語初級 a							
教科書	「中国語スタンダード(コミュニケーション編)」, 何曉毅 ほか, 白帝社, 2005年							
参考書	参考書備考: 辞書							
メッセージ	毎回出席すること。声を出して発声すること。授業外の復習予習は大事。繰り返し練習は上達の秘訣。 なお、このシラバスはあくまで予定であり、受講者の修得度などを考慮して進度を調整することがある。							
キーワード	中国語 初級 b							